

## 1 互いの思いや願いを共感的に受け止め合う集団を育てる

「わたしの気持ちを伝えたら、友達はわかってくれた。心配し、励ましてくれた。」

そんな経験が、児童の心の中に学級や仲間への愛着と信頼をはぐくんでいきます。一方、自分の表現を受け止めてもらえない相手の前で、人は心を開くことはできません。無理に伝えようと言葉や態度を荒げたり、伝えることをあきらめ相手との関係を遠ざけたりします。

児童が安心して自分を表現できるようにするには、互いの思いや願いを共感的に受け止め合う集団を育てることが大切です。

そのためには、普段の学級経営を通してお互いを大切にしようとする雰囲気をつくること、教職員と児童との信頼関係や児童同士の温かい人間関係をはぐくむこと、各教科や道徳の時間等の指導を通して、お互いの思いや願いを分かり合おうとする姿勢を育てることが必要です。

これらのことが満たされた集団においては、児童は安心して生活することができ、自分を伸び伸びと表現できるとともに、周りの友達に関心を持ち、進んでかかわろうとするようになります。

### 温かい人間関係を基盤におく

道徳の時間の指導は、学級での温かい人間関係が基盤にあってこそ効果を発揮する。教師と児童の信頼関係や児童相互の人間関係を育て、一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を日常の学級経営の中でつくるようにする。また、それを生かした授業をすることによって、人間関係を一層育てていくようにすることが大切である。

(小学校学習指導要領解説 道徳編より)

### 【具体的な実践事例】

- 縦割り班（異年齢集団）やペアでの活動後、互いに感謝の気持ちを伝え合う場を設ける
- 同じ事物に対して思ったことや感じたことを自由に表現し受け止め合う活動をする
- 道徳の時間等に、言葉で表しにくい気持ちの変化や互いの考えを役割演技で表現し合う
- クラス替えや席替えのとき、友達とのふれ合いを楽しむグループ活動やゲームをする

### 実践事例①：自由に表現し合う活動を位置付ける

ある学校では、互いに負荷なく自己表現し合える学級集団をつくるために、朝の時間を利用して、見たものを自分の言葉で表現する活動をしています。

例えば右のようなアートカードを見て、感じたことを言葉で表現し合います。その際は、「○○な感じがします。」「○○とよく似ています。」と、どんな表現をしても、間違いにはなりません。児童は安心して自分の感じたことやイメージを学級の友達に投げかけることができます。なるほどと思わせる見方や笑いを誘う表現が飛び交う中で、互いの意見を受け止め合う温かい雰囲気が醸成されていきます。この活動をするようになってから、自分の思いを積極的に表現したり、相手の思いを汲み取ろうしたりする児童が増えてきています。



## 実践事例②：道徳の時間に互いの感じ方や考え方を受け止める

道徳の時間には、読み物資料の登場人物の立場を借りて、自分の感じ方や考え方を表現させることができます。ある学校では、表現の場を工夫することで、児童が感じたことや考えたことをありのままに表現し合えるようにするとともに、友達の中にはいろいろな感じ方や考え方があることを理解できるようにしています。

### ◆ペープサート・役割表現

主に、低学年の授業で取り入れている。

児童は、登場人物になりきって演じることによって、自分の感じ方や考え方を表現することができる。

また、友達の演技を見ながら、同じ場面でも人によっていろいろな言動があることを理解することができる。

### ◆気持ちカード・心情カード

登場人物の気持ちを考える手だてとして、下学年では、喜・怒・哀の表情を表す「気持ちカード」を持たせている。



上学年では、「心情カード」を使っている。言うべきか、黙っておくべきかなど、判断に迷う2つの気持ちについて2色の割合で表現させている。



## 効果を上げるためのチェックポイント

### ○ 児童が安心してかかわり合うためのルールをつくる

各学級には集団で生活するための様々なルールがありますが、安心してかかわり合えるためには、管理面だけが強くなるようにすることが大切です。例えば、「友達の意見は静かに聞こう」というルールは、しゃべることを禁じることをそのものを目的とするのではなく、友達の意見を最後まできちんと聞くようにすること、話し手が安心して自分の意見を言えるような聞き手になることを目的としたルールとして機能しなければなりません。

ルールをつくる過程では、児童が自らの経験等を基に意見を出し合い、どのような聞き手であってほしいかを考え合っていくことも大切です。

### ○ お互いが分かり合うことの楽しさやうれしさを実感させる

生徒指導上の問題を抱えている児童の中には、「いくら言っても友達は自分のことを分かってくれない」「友達は僕に反対ばかりするから、友達の意見は聞きたくない」という思いを日々積み重ねている児童が少なくありません。

そうした児童にとっては、まずはささいなことであっても、「友達に受け止めてもらったり、みんなで分かり合ったりすると、こんなに楽しい気持ちになれるんだ」と実感できる経験を充実させることが大切です。また、「考え方は自分と違うけれども、友達はどのようにしてそう考えたのかは理解できるよ」という立場も大切にしたいものです。

## 2 思いや願いを表すこと・伝えることをサポートする

友達とトラブルになった児童に話を聞いてみると、お互いの思いや願いがうまく伝わっていないことが多くあります。自分や他者の思いや考えを表現したり受け止めたりする語彙力や表現力が乏しいために、他者と適切な関係がとれず、その苛立ちからつい感情的になってしまうのです。

昨今、こうしたケースが増加しており、思いや考えを言葉にして伝える能力の育成が重要になっています。

右のように、「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」では、感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすることの大切さと指導上の留意点が述べられています。

また、国語科の「話すこと」の指導事項には、相手や目的、場に応じて、話題

設定や取材、話すことの構成や内容及び言葉遣いに関する力について系統的に位置付けられており、児童の実態に応じ、身に付けた力が生活の場で生かされる指導が求められます。

感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること

感性・情緒は、事象との関わりや他者との人間関係、所属する文化などの中で感じたことを言葉にしたり、心のこもった言葉を交流したりすることによって一層育まれていくものである。そのような豊かな感性・情緒を通して、良好な人間関係を築くことにもつながる。

なお、論理と情緒とを対立する問題として捉えられることがあるが、必ずしも適当ではない。物事を直観的に捉えるのではなく、分析的に捉えることも情緒を豊かにしていく上で有効である。例えば、単に「わあー、すごい」という言葉だけで感情表現するのではなく、「何が」「どのように」「すばらしい」のかについて、具体的な表現を用いて相互に伝え合うことにより、より細やかな感性・情緒を実感できるようになる。

このようなことから、感性・情緒等に関する指導を行う際、  
(1) 様々な事象に触れさせたり体験させるようにすること、  
(2) 感性・情緒に関わる言葉を理解するようにすること、  
(3) 事象や体験等について、より豊かな表現、より論理的で的確な表現を通して互いに交流するようにすることが大事である。

(言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】より)

### 【具体的な実践事例】

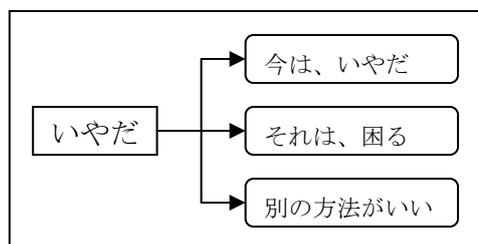
○国語科において、児童の発達の段階に応じた表現の仕方を身に付けさせる

○表現の仕方を目に触れやすい場所に掲示し、必要に応じて活用させる

### 実践事例①：具体的な表現を用いて感情を伝える

ある学校では、低学年において、「いや」とか「やりたい」など限られた言葉でしか自分の気持ちが表現できない児童が増えてきたことから、国語科を中心に、右のような場面を応じた具体的な表現を用いて思いや考えを表す学習に取り組んでいます。

さらに、学習内容を学級通信等を通じて保護者に発信したり、地域の集いにおいて紹介したりすることで、地域全体の取組に広がっています。



## 実践事例②：よりよい関係の合い言葉を詩にして掲げる

ある学校では、よりよい人間関係づくりのために、「学び合い」「助け合い」「分かち合い」「支え合い」「高め合い」の五つの合い言葉を決め、望ましい言葉かけができるようにしています。この取組の中で、5年生は、みんなで考えて「五つの合い言葉」という詩を作りました。

学校生活には、困ったり失敗したりして、友達にどんな言葉でかかわればよいか迷う場面があります。そんな場面でも、この詩を基に考えることで、お互いの思いや願いをうまく伝え合えるようになってきています。そして、うまく伝え合えることを実感した児童の中には、他の場面ではどんな言葉で伝えるのがよいかを考える子も見受けられます。

### 五つの合い言葉

助け合い

困っているときに 力を貸せる やさしい心  
「手伝おうか。」

重い荷物を持っていたら 友達が声をかけてくれた。  
心まで 軽くなった。

支え合い

失敗しても だいじょうぶと 言える心  
「ドンマイ。次、がんばろう。」

バレーボールでミスをした時 みんながはげましてくれました。  
ホッとして 心が 温かくなった。

分かち合い

ともに喜び ともに悲しむ心  
「がんばったね。」

競技会でいい記録が出た時 いっしょに喜んでくれた。  
みんなの拍手で うれしさが二倍になった。

学び合い

自分とちがう考えを 認め合う心  
「なるほど。それいいね。」

授業で発表すると みんな真剣に聞いてくれた。  
友達の考えを もっと知りたいと思った。

高め合い

ともに よくなろうと 思う心  
「いっしょに やってみよう。」

苦手なことから逃げたかった時 友達がさそってくれた。  
チャレンジしてみようと 勇気がわいてきた。

助け合い

支え合い 分かち合い 学び合い 高め合い  
広げよう みんなの 五つの合い言葉

## 効果を上げるためのチェックポイント

### ○ 教職員が感性や情緒をはぐくむコミュニケーションのモデルとなる

児童のかかわりを温かいコミュニケーションにするために、教師がモデルとなって積極的に温かいコミュニケーションを図ることが大切です。「寒いよ」と訴えれば、「寒いね」と返してくれる、傾聴と共感を大切にした教職員の姿勢が、ストレスを抱える児童に「話してよかった」という気持ちを持たせます。

### ○ 実際のコミュニケーションを通して鍛える

国語科等で学習したり、学級活動等で約束し合ったりした表現の仕方について、児童が日ごろの生活場面で使ってみる、そして、使っていくうちにうまくなっていくという過程が大切です。「こんなときは丁寧な言葉で話すといいんだな」「実物を見せたり図表を示したりするとよく伝わるんだな」「資料や相手の言葉を引用するとすれ違いが防げるんだな」と思える経験が、児童の学校生活の中にたくさん生まれるようにしたいものです。